

第6学年の保護者の皆様

札幌市立新札幌わかば小学校
校長 中村 ちひろ

令和8年度 全国学力学習状況調査の結果と傾向について

4月に6年生を対象に「令和8年度全国学力・学習状況調査」を実施いたしました。個人票につきましては、既にお渡ししましたが、本校の調査結果を分析し、課題と改善の方向を検討しましたのでお知らせいたします。また、札幌市の実施報告、分析、改善策も以下のページに掲載されています。併せてご覧ください。 ※リンクはこちら ⇒ [全国学力・学習状況調査／札幌市](#)

質問紙調査の結果から

矢印は、全国平均に比べ
・上回っている↑ ・やや上回っている↗
・同程度→
・下回っている↓ ・やや下回っている↘

【心理的安全性・自己有用感】

学校の勉強のことに、親や家族と話す。	↑
学校での悩みについて、親や家族と話す。	↑
先生は、よいところを認めてくれている。	↑
困りごとや不安があるときに学校にいる大人にいつでも相談できる。	↑
人の役に立つ人間になりたいと思う。	↑
学級では、人と違う意見を言っても否定されないと思う。	↑

学校の勉強や悩みについて家庭で話し合う機会があり、保護者の皆様が子どもたちの思いを受け止め、支えてくださっていることがうかがえます。また、教職員も子どものよさや頑張りを認め、困ったときに相談できる関係づくりに努めています。家庭と学校の連携が、子どもたちの安心感や、誰かの役に立ちたいという自己有用感の高さにつながっています。

【学びに関する意識等】

5年生までに受けた授業で、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいた。	↑
友達と話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり新たな考えに気付いたりしている。	↑
授業で学んだことを、次の学習や実生活に結び付けて考えたり、生かしたりしている。	↑
友達や周りの人の考えを大切にして、協力しながら課題解決に取り組んでいる。	↑
算数の勉強は好きか。	↓
算数の問題の解き方が分からないときは、あきらめずにいろいろな方法を考えた。	↑
算数の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思う。	→

自ら課題解決に向けて考え、対話を通して考えを深める姿勢に成果が見られます。特に算数においては、難問にも粘り強く取り組む意識が高まるとともに、学びの有用性を実感している児童が極めて多いことがうかがえます。

一方で、「算数が得意・好き」と回答した児童は全国平均を下回っています。今後は、具体操作や図などを効果的に活用した実感を伴う学びを大切にし、課題解決への手応えや自信を育み、算数への興味・関心を一層深めていく授業づくりを進めていきます。

教科に関する調査結果の概要及び改善の方向

【国 語】

本校の概要

【知識及び技能】

「言葉の特徴や使い方」

- ・ 全国平均を上回っている

「情報の扱い方」

- ・ 全国平均とほぼ同程度であるが、やや上回っている

【思考力・判断力・表現力等】

「話すこと・聞くこと」

- ・ 全国平均を上回っている

「書くこと」

- ・ 全国平均とほぼ同程度であるが、やや下回っている

「読むこと」

- ・ 全国平均を上回っている

今回の調査における課題

- 「不思議」のような複合語や複雑な漢字において、一部の文字を誤ったり書き落としたりする傾向が見られ、文中で正しく書き表す力に課題が見られる。

- 集めた情報や資料を活用し、目的に合わせて自分の言葉で表現の工夫をしながら文章をまとめる構成力に課題が見られる。

改善の方向

- 文や文章の中で漢字がどのように使われているかを意識させ、習得した漢字を使った例文作りなどに組みこませる言語活動を重視する。

- 自分の考えと結び付けて文章を書く機会を日常的に設ける。

- 収集した情報や資料を適切に引用し、制限された文字数の中で要点を整理しながら文章を構成する力を高める。

【算 数】

本校の概要

【数と計算】

- ・ 全国平均を上回っている。

【図形】

- ・ 全国平均を上回っている。

【測定】

- ・ 全国平均を上回っている。

【変化と関係】

- ・ 全国平均を下回っている。

【データの活用】

- ・ 全国平均を上回っている。

今回の調査における課題

- 「基準量・比較量・割合」の関係性を捉えて全体の量を求めたり、数直線や図、表から数量の関係を正しく読み取ったりする領域で課題が見られた。

- 二次元の表から、条件に合う数を読み取ることに課題が見られた。

改善の方向

- 関係図やテープ図、数直線、表などを日常的に活用し、「基準にする大きさは何か」「どの数量に着目しているのか」を視覚的に整理して考える場면을重視する。

- 二次元の表の読み取り方を丁寧に指導すると共に、読み取ったことをノートに書いたり友達同士で説明し合ったりするアウトプットの機会を日常的に取り入れる。